



カンボジア訪問報告

今後の活動をどう進めるか

大澤 龍

3月に、以下の日程でスタッフの渡部・細谷・大澤がカンボジアを訪問しました。主な目的は、アジア未来学校及び隣村の公立小学校2校の現状を確認し、今後の活動方向を検討する手がかりを得ることでした。なお、学校訪問が1日だけになったのは、現地NGOポンロック・タマイのディレクター ポット・リティ氏が、カンボジア工業鉱山省の公務員であるため、それ以上の時間がとれなかったためです。

日程

- 3月11日(土) リティ氏及び安田氏(前カンボジア事務所長)と、訪問の目的と行動日程の確認、および今後の方針討議。
- 3月12日(日) トゥール・スレン(ポル・ポト時代の強制収容所)見学。
マーケットで子ども向けの本の販売状況調査。
ポット・ヴォーン氏(前プノンペン市教育局副局長)と会食し話を聞く。
- 3月13日(月) ルセイサン小学校、ワット・ハー小学校、アジア未来学校訪問。
キリングフィールド(ポル・ポト時代の処刑場)見学。

以下の記事に関する注

アンロンコン・タマイ村：アジア未来学校のある村。「タマイ」は「新」の意味。

プッカー村：アンロンコン・タマイ村の北側の隣村。公立のルセイサン小学校がある。

アジア未来学校で識字課程を終了した児童はこの学校に通う。

アンロンコン村：アンロンコン・タマイ村の南側の隣村。公立のワット・ハー小学校がある。アジア未来学校の先生お二人は、この小学校の先生でもある。

活動の現状と今後の方向について

1 これまでの活動目的の達成状況

アジア未来学校設立の目的「アンロンコン・タマイ村の学校に行けない(行っていない)子どもたちを学校に行かせる」は、下記の事実からほぼ達成されたと判断できます。

- ① アジア未来学校の生徒数は、訪問時の実数で14、5名。(牛の世話のために教室を出たり入ったりしている子どもがいるので数が確定できない。)
- ② アジア未来学校からルセイサン小学校に転入した子どもたちは、現在も登校を続けている。

| ～目 | 次～ |
|-----------------|----|
| カンボジア訪問報告 | |
| 今後の活動をどう進めるか | 1 |
| 子どもたちの様子をこの目で見て | 3 |
| 私が見たカンボジア | 5 |
| イベント参加報告 | 6 |
| 「生きる」ために | 7 |
| 日韓アジア基金で学んだこと | |
| スタッフ紹介 | 8 |
| 韓国スタッフとの話し合い | 9 |
| 事務連絡 | 10 |

2 今後の活動方向をめぐって

上記の結論を踏まえ、安田、リティ両氏と、今後考えられる選択肢を検討しました。一部はニュースレターNo. 16でお伝えしたのですが、それも含めて、つぎの4つの案があります。

- ① アジア未来学校を、ルセイサン小学校の補習校と位置づけて、経営を継続する。
- ② アジア未来学校の建物を使い、ほかの活動を展開する。(例えば成人識字学校)
- ③ ルセイサン小学校の教育の質の向上を、何らかの方法で支援する。
- ④ 新たに別の場所で識字学校を開設、経営する。

各案ともそれぞれ長所・短所があり、いくつかを並行して実施することも考えられます。

いずれにせよ、現地の関係者(先生、生徒、保護者、村人、プノンペン市教育局担当者など)の意見をよく聞き、当基金の実力(資金力、人的資源)を勘案した上で判断することが重要だと考えています。

上の考えに基づき、私たちの帰国後、ルセイサン小学校で「教育の質の向上」についての話し合いが実施されました。クメール語で行われたため、その詳細はリティ氏の英訳での報告を待っていますが、討議項目は以下であったとのことです。

- ① ルセイサン小学校の先生たちの当面する問題は何か。
- ② アジア未来学校からの編入生が、以前からルセイサン小学校に通っている生徒より成績がよいのはなぜか。
- ③ どうやって教育の質を上げるか。

公立小学校の授業の質の向上について

ルセイサン小学校、ワット・ハー小学校の授業を参観して感じたことですが、先生方は優しく熱心に教え、生徒は真面目に授業を受けています。それなのに、アジア未来学校からの編入生の方が成績がよかったり、ワット・ハー小学校からアジア未来学校に逆編入の生徒が来たりしています。しかもアジア未来学校の先生お二人はワット・ハー小学校の先生でもあり、授業の技術、内容がことなるとは思えません。ルセイサン小学校の先生方も、上記のように討議項目の一つに入れている位ですから、今回ちょっと見ただけでは原因が判るはずもありません。1クラスの生徒の人数の違い、先生の給与の額と支給の確かさの違いなどが頭に浮かびますが、今後、私たちが公立小学校を支援するならば、しっかり詰めておく必要がある問題です。



ルセイサン小学校の子どもたち

学校に行くという習慣

「なぜ学校に行けないか(行かないか)」については、これまで「お金がない」「親が教育に関心がない」などいくつかの理由が挙げられていました。それぞれ当たっていないことはないのですが、今回感じたのは、「学校に行く習慣が無いから行かなかった」のではないかとということです。アジア未来学校からルセイサン小学校に編入した子どもは、一人

もやめていないのです。2003年4月の開校時には、アンロンコン・タマイ村の300人の子どものうち、150人が学校に行っていませんでした。この時と今とで、村での大きな変化はアジア未来学校ができたことだけです。初めに述べた理由で学校に行かなかったのなら、アジア未来学校の識字課程終了後、ルセイサン小学校に通い続けることはないはずです。(これは私たちの最大の心配でもありました。) 一人もやめていないというのは、アジア未来学校に通うことで、「学校に行く」という習慣を子どもも親も身につけたのではないかと思います。「読み、書き、計算」を教えるという私たちの目的は達成されたのですが、それと同じぐらい価値のある、思わぬ成果が挙げたことに驚き、嬉しく感じました。

ポット・ヴォーン氏のこと

ポット・ヴォーンさんはプノンペン市の前教育局副局長であり、ポット・リティさんの父上でもあります。長い間、成人を含む識字教育分野(Non Formal Education)を担当されました。2002年秋に、アジア未来学校をアンロンコン・タマイ村に開校するようにご指導いただいたのもこの方です。それから昨年秋に退任されるまで、アジア未来学校運営の役所側の窓口として大変お世話になりました。



ポット・ヴォーンさんとの会食
前列左から二人目がヴォーンさん

会食の時、識字教育で最も大事なことは何かと伺ったところ、「現地の状況を定量的に確実に把握すること」とのお答えでした。また、現状での問題点についてお聞きしたところ、「公立小学校で先生が子どもたちから授業料を取ること。取らないように通達は出すが、効力は少ない」とのお話でした。この分野で長くご苦労された方のご意見として、今後の活動の参考にしたいと思います。

子どもたちの様子をこの目で見て

細谷 恭一郎

「カンボジアの子どもたちに教育を！」

日韓アジア基金のスタッフとなってから4年間、この標語を掲げていながら、実は今回まで彼らとじかに触れ合ったことがなかった。一体どんな子たちなんだろうという好奇心を抱えながらカンボジアへと向かった。わずか7泊8日、そのうち生徒と接したのは1日のみという短い期間であったが、そこで感じたことを書いてみたい。

まず何よりも印象に残っているのは生徒たちの礼儀正しさである。例えば学校へ到着し、教室へお邪魔すると、生徒が一斉に立ち上がるのである。そして手を合わせ、大きな声で挨拶をしてくれる。なんて言っているのか分からなかったけど、たぶん「こんにちは」ってことだ。

僕らも応えて、「オーケン(ありがとう)」。すごく気持ちがいい。これはアジア未来学校だけでなく、ルセイサン小学校でも、ワットハー小学校でも、1年生から6年生までそうであった。

では授業中の姿勢はどうだったか？一言で言うならば、和気藹々とした雰囲気の中、

子どもたち一人一人が授業に主体的に参加しているように感じた。まず、先生の話をしっかり聞いている。そして、手を挙げ、声を出し、しっかりと与えられた課題に取り組んでいる。またこれはアジア未来学校で見た光景だが、新しく入ってきて進度に遅れがある

子を、他の子たちが協力して教えたりしていた。そして常に、笑顔。どっかの大学生よりよっぽど優秀だ。日本に来たら即エースだな。

もちろん、カンボジアは日本と比べて教科書も足りず、ノートも筆記用具も充分ではない。特にアジア未来学校ではその度合いが強い。家の仕事のあいまに授業を聞きに来ているこどもたちもいて、彼らは手ぶらで登校してきている。

こんな中での授業といえば、先生が黒板に文字や問題を書き、それ



進度の遅れがある子を助ける子供たち

を生徒たちが声を出して読み上げ、手元の小さな板に書く、といった程度のことしかできない。にもかかわらずメキメキと力をつけている。その秘密はどこにあるんだ？

国にとって、人は石垣、人は城。彼らが“このまま成長していくならば”、いかなる困難があろうとも、カンボジアという国は将来立派な姿を見せてくれるだろう。子供たちの様子を見てこう感じたのは、私が普段塾の講師として現実に日本の小1から高3までと接しているからだ。そこでは自分から挨拶をするというケースは稀だし、授業にも受身であることが多い。最低限やれと言ったことをやる生徒は優秀なほうである。この違いに、私は強い危機感を感じている。

確かに我々は、日本がカンボジアを支援するという目的の下、活動している。そして今回の学校見学はそのコンセプトの延長線上に実現した。しかし今回の旅を通して、彼らから我々が学ぶべきことも多いことも痛感することとなった。

最後に、アジア未来学校でのちょっとしたイベントについて書こうと思う。実は我々が紅一点、渡部友理恵嬢はこの日のために折り紙を持ってきていた。簡単だし、できたもので遊べる。思いがけず休み時間に「特別授業」が始まった。まさかカンボジアでも生徒の前に立つことになるとは。みな興味津々といった眼差しで、はしゃぎながら紙を折る。こんな感じ？そうそう、上手いよー！

四苦八苦しつつも完成した紙飛行機と紙風船はカンボジアの空に舞い、子どもたちの歓声が教室を満たしていた。



紙飛行機と紙風船で遊ぶ子どもたち

初めて私は、私たちの未来学校がある国、「カンボジア」へ行きました。私がカンボジアを訪問した目的は3つ。まず「アジア未来学校を見に行くこと」、つぎに「子どもたちの授業風景を見、また子供たちと同じ目線で授業に参加すること」、そして「カンボジアという国を肌で感じること」でした。今回、私は私の視点から見てきた「カンボジア」を紹介しようと思います。

3月11日、カンボジアの気温はおそらく35℃を超えていたのではないのでしょうか。首都プノンペンに到着し、空港を出た時の眩しい太陽と暑い日差し、体からどっと吹き出す汗。あらためて、自分が東南アジアの地に足を踏み入れたことを実感しました。プノンペンの主要な道路は、ほぼきれいに舗装されていましたが、一步脇道に入ると、砂ぼこりの舞う泥道がほとんどでした。3月は乾季でしたが、雨季になるとそれらの泥道が水浸しになり、薄茶色く濁った水が溢れる様子を想像しました。

ある朝、私はホテルのバルコニーから外を眺めていました。するとホテルに面している家々を回る人がいます。よく見ると、仏教の僧侶でした。家々から人びとが出て彼に喜捨を差し出し、そして手を合わせていました。カンボジアが仏教国であると実感したできごとでした。

この旅で、私は世界遺産であるアンコール・ワットも訪問しました。往きは、6時間かけてバスでシェムリアップへ。私たちが乗るはずの飛行機が、お客が少なく運休になってしまったのです。しかし、バスの旅路は貴重なものになりました。バスは多くの農村を通り、一面に広がる田畑、家畜を世話する人、野菜や果物を売る人、物資を運ぶ人、そして公立小学校も眺めることができました。都市部はコンクリートやレンガ造りの建物が多いのですが、農村部の家は、簡素な高床式の家や、風雨を防ぎにくそうな粗末な家々でした。

カンボジアには、内戦という悲しい歴史があります。カンボジア人同士の虐殺、ポル・ポト時代の傷跡は現在も残っていました。反体制とされた人々を尋問する強制収容所として使われた「トゥール・スレン」では、静かな外観からも異様な震えと空虚感、恐怖感を感じました。人を繋いだ鎖、レンガや木で仕切られた狭い牢獄、当時の恐ろしさを語る血の跡。私は虐待を物語る写真と絵に、目を覆わずにはいられませんでした。そして収容所にいた人々は「キリング・フィールド」へと移され、そこで数え切れないほどの罪無き人たちが殺されたのです。土の中から掘り出された多くの遺骨が、一カ所にまとめられ埋葬されていました。掘り返された場所には、現在も服の切れ端が泥にまみれて散らばっています。そして供養のための線香の匂い。日本に戻ってきた今も、そこに漂う悲しみと恐怖の記憶がよみがえって来ます。辛い過去を思い出させるこの場所に、カンボジア人はあまり訪れないようでした。見ることを勧めるのは、彼らにとって残酷なことかもしれません。しかし、私は、この悲劇を、この場所を忘れないで欲しいと思いました。

悲しい過去と反対に、カンボジアには実に穏やかな表情の人が多く、子どもたちは澄んだ美しい目をしていました。人びとは笑顔を絶やさず、手を合わせて相手の目を見ながら挨拶します。

私が、自分の眼で見、耳で聞き、鼻で感じ、この手で触れた「カンボジア」。カンボジアは、開発途上国と言われます。なぜ、貧困地域は豊かにならないのか？私は、産業が乏しく仕事がないから、働こうとしないから貧しいのだろうと思っていました。しかし、私が

実際に彼らを見て思ったことは、彼らは観光商売だけでなく、カンボジア人同士の小さなコミュニティにおいても、実に働き者であるということです。この国はきっと、今よりもっと発展していける。そういう力を国民は持っていると確信しました。

今回の訪問で、私がカンボジア人の思考を100%理解することはもちろんできませんでした。彼らは、今以上の発展を必要としているのか、もしかしたら私たちが発展を推進しようと思うのは独りよがりかも知れません。私たちがしてあげられること、それは彼らに、外からの支援を期待させるのではなく、彼ら自身が行動し、発見する、そして彼らの未来の可能性を少しでも広げるための手助けであると思います。カンボジアへ行くにあたって、協力をしてくださった多くの方々に感謝しています。今、ここ日本で私ができること、カンボジアとの交流、支援、理解を続けていきたいと思っています。

「コレカラフェスタ」にブースを出展

2月19日(日)、東京九段の科学技術館で開かれた表記イベントに参加しました。このイベントは東京ボランティア・市民活動センター(通称ボラセン)主催で、企業をリタイアした、或いは近々リタイアする中高年の方にボランティア活動を紹介、参加を呼びかけようというものです。当日は約30団体が参加し、当会は40人の方に資料を配布し、15人の方に活動説明を行いました。

また、このイベント内の催しの一つ「おじさんのためのNPO車座トーク」に、講師として大澤が参加しました。サラリーマン経験はNPO活動に大いに役立ち貢献できるので、自信と責任を持ってNPOに参加して欲しいことを、3年半の体験に基づきお話ししました。



「コレカラフェスタ」にて

「国際化市民フォーラム in 東京」にブースを出展



[国際化市民フォーラム in 東京]にて

2月11日(土)に東京大井町の品川区総合区民会館で開催された上記イベントに参加しました。これは「国際交流・協力 TOKYO 連絡会」と「東京都国際交流委員会」が主催で、外国人の定住化が進む中で、その問題点と対応を、関係する広い範囲の人たちが集まり討議することを目的とするものです。

いくつかの分科会と並行して、在日外国人支援団体、国際協力団体のブース出展が行われ、私たちはこのブースに出展して、100人以上の方に資料を配布し、数人の方に活動の説明をすることができました。

—ふたりの学生スタッフがこの春、社会人として新たな出発をしました。
日韓アジア基金での活動はふたりにどんな経験を残したでしょうか。—

「生きる」ために

菊池 礼乃

一度も会ったことのない韓国の祖父が残した言葉—「人はお金を持って死ぬことは出来ないし、お金を残すと無駄な争いを生むだけ。次の世代に残すべきものはお金ではなくて、生きる知恵を与える教育。だから貧しくても教育が大事なんだよ。」母は私がこの歳になるまで繰り返しこの言葉を教えてくれました。小さいときは、「勉強しなさい！」のうまい口実のような気がして「ふ～ん」というくらいにしか聞いていませんでしたが、今春大学を卒業するに当たって、私自身に学びの機会を援助してくれた両親や祖父母に感謝しています。

日韓アジア基金でもまた、この「教育」について年齢、性別、国籍を超えた会員、スタッフと共に同じ目的を持って考え、実践をしてきました。祖父が言ったように、「教育」は「よりよく生きる」ということに繋がるのだと思います。だからこそ、教育支援は非常に難しく、実に大きな意味があることなのでしょう。日韓アジア基金の活動は、カンボジアの子どもたちに生きる知恵を学ぶ手助けをし、どこかで彼らの人生に影響を与えていると確信しています。そのような教育支援という現場に大学生ながら参加できて、大学の講義とは別の学びがたくさんあったように感じています。それを社会人になっても生かして、さらに日韓アジア基金の一員としてカンボジアの子どもたちを大いに支援していきたいです！

日韓アジア基金で学んだこと

高橋 政行

日韓アジア基金は私の学生生活と共にありました。代表のウズグンから声をかけられたのが、高校3年の1月であったと記憶しております。あるイベントの会場で「君の力を必要としている」その一言から、大学に入学した後も大学内でのサークル活動そっちのけで日韓アジア基金での会議に参加するようになっていきました。今振り返ると、この出会いは僕の人生での大きな転機であったことに間違いありません。

僕が参加し続けた理由は3つあります。まず、「想像力」をかきたてられるからです。日本では当たり前なことが、カンボジアでは当たり前でないことがしばしばあります。例えば、日本人にとって「教育を受けることは当たり前」ですが、カンボジアでは異なります。支援を開始した当初、アンロンコン・タマイ村の児童の約半数は未就学でありました。その、学校に行くことが当たり前ではない人に対して、どうすれば学校に行ってもらえるか。自分の中の「当たり前」がカンボジアでは「当たり前」でないので、「なぜ?」「どうすればよいの?」と疑問を抱き、その村に住む子どもの気持ちになってみたり、親の気持ちになってみたり、色々と想像をめぐらせます。他のNGOは、子どもに米の配給を行うことで学校に来させていますが、果たしてそれが正しいやり方でしょうか。確かに短期的な目で見れば、子どもたちは学校に喜んで来るかもしれませんが、しかし、それが当たり前になってしまえば、もっとお米をくれないと学校に行かない。といった事態になりかねません。その方法では、我々の考える「自立」とは程遠くなるのではないのでしょうか。「想像力」をもってことにあたり、何ができるのか、考えることは自分の成長にも通じることでした。

つぎに「信じる力」がついたように思います。日韓アジア基金の事務局長を拝命した後、

ユニセフと JANIC が主催する NGO のスタッフ能力強化研修でフィリピンでの研修に参加させて頂きました。そこで、フィリピンの児童買春の実態を知り、貧しくて毎日 3 食を口にできない子どもたちと交流しました。どんなに貧しい環境にあっても、明日を信じる彼らを見ると元気が出てきました。さらには、ユニセフのフィリピン事務所でも「どんなに状況が困難であっても決して諦めてはならない」という言葉を頂き、信じて突き進む大切さを学びました。

3 つ目に、「大切な仲間」を得ました。おそらく世界中を見渡しても、これだけ幅広い年齢層の人たちが「カンボジアの子ども達に教育を」を合言葉にして動き回る団体もないかと思います。シニアスタッフからは会社での経験を伝えていただき、ジュニアスタッフからとも、気付かなかった知恵をたくさんもらいました。そして、日頃からご支援頂いております会員の皆さまも私にとっては大切な仲間であると感じております。応援のお言葉やお手紙は活動を進めていく上での活力源でした。とても感謝しております。

スタッフ紹介

井内 和夫

私はバイヤーという仕事の関係や個人的にも趣味が旅行ということもあり、世界のいろいろな国を訪れる機会に恵まれました。そのなかで特に印象に残っているのは今から約 20 年前に南アフリカ共和国、ボツワナ共和国、トルコ共和国を訪れた時のことです。

ふとしたことから出会った子どもたちや長距離トラックの運転手さんたちが、澄んだ輝く目をしていました。日本に比べれば電気製品や車も技術的に遅れており、ファッショナブルなブランド品の服もなく、贅沢な食べ物もなく、質的にはとても豊かとはいえませんが、かれらは自分自身や家族、自然や国を誇りにしていました。仕事人間で、日本の技術や文明を自慢していた自分がとても惨めに思え、真の「豊かさ」とは何かを考えさせられました。



15 年ほど前、南アフリカ大統領マンデラ氏と

「経済的な豊かさ」と引き換えに「心の豊かさ」

をどんどん失っていく自分や日本に危機感を抱いて帰国することをくり返しました。

49 歳になったころ、人生の前半は追いつけ追い越せと経験やキャリアもなく若さだけを武器に「生活のため」「自分のため」にがんばってきたが、後半は社会貢献をテーマに困っている人が自分で自立することを何かお手伝いする、それをその人のためにではなく自分のためにする。そんな生き方をしたいと考えていました。

そして、数年前に日韓アジア基金と出会い、カンボジアの澄んだ輝く目をした子どもたちと出会いました。韓国や中国をはじめとしたアジアの人たちと手を取り合って、壁を乗り越えて（国は違っていても同じ人間です）「Do For Others」という価値ある目標の具現化に向かって頑張っていこうと思っています。「利益優先」「効率と成果」「勝ち組と負け組」という世の中で、いろいろな意味で戸惑っている現代ですが、自分と違う立場の人の存在を知り、認める。そして次の世代に役にたつことをする。そんなことを思いながら、ささやかながら活動を続けていきたいと思っています。

最後に、たくさんの方々が「日韓アジア基金」に参加していただけることを心からお待ちしています。

「歴史の壁を越えて、日本人と韓国人が手をたずさえてアジアに貢献したい」という目的を掲げてスタートした日韓アジア基金ですが、残念ながら、このところ韓国側の活動は停滞しています。それには、これまでのスタッフが学生中心で、学業・就職活動などで、あるいはもう就職して社会人となってそれぞれ忙しい。かといって、宗教団体を除いてはボランティア活動が活発でない韓国では、日本のようなシニアスタッフも得にくいなどいくつかの理由があります。それでも何とか日韓の連帯を継続したいというのが、双方の希望です。4月初め、ソウルで韓国側スタッフ3人に会い、3月の日本側スタッフ3名によるカンボジア訪問の成果と今後の活動方向の問題点を伝えるとともに、今後の方向を話し合いました。

韓国側の考えは以下の通りです。

カンボジアの状況はよくわかりました。今後の活動方向について考えると、いまある建物にたくさんのお金を使ったので、新しい場所でまたやり直すのは難しいでしょう。母親たちに文字を教えたり職業教育したりして地域社会に貢献するのもよいのではないかと思います。「子どもたちに本を読み聞かせる」活動よりは現実的な方法かと思います。しかし職業教育は、需要と販路が確保されないといけないようです。

わたしたちも日本との交流を通じて多くの活動をしたいと思いますが、いまはメンバーの事情がよくなく、活動するにあたって困難が多いです。それでもジュニアメンバーをはじめ日本側から韓国を訪問される方があれば、お会いする場をつくることはできます。しかしまだ組織的に計画を立てて推進するには、韓国スタッフの事情が困難です。それでも夏以後には、もう少し好転するでしょう。

日韓で提携して基金の仕事をするにあたって、必ずしもわたしたちの団体でなく、新しい団体を探してみるのもよいかと思います。もし、交流をともにすることを願う新しい団体を見つけられたら、わたしたちもそれを手伝っていけると思います。いま、わたしたちが中心になって活動することはつらいですが、中心になれるほかの団体があれば、時間を割いてともに活動することは可能だと思います。

いつでもジュニアスタッフやほかの方たちが韓国に来られれば、嬉しく楽しい場を用意して話し合いたい、と思います。

(イジェウ)

左からイジェウ・コンキョンス・チョンヘジさん、波多野



韓国側の提案、すなわち「これまでのスタッフ以外で、提携できるほかの既成団体を探す」について、日本側でも了承し、イジェウさんに探していただくことにしています。日韓アジア基金の趣旨に賛同して集まったスタッフ・会員はそれぞれカンボジアへの支援だけでなく、韓国との交流も願ってのことだと思われまますので、今後も韓国との提携の道を探って行きたいと思っています。(波多野)

フリーマーケット商品送付のお願い

ジュニアスタッフ有志

何時もご協力ありがとうございます。次回は5月か6月に出店を予定しております。下記のものがありましたらご協力ください。

未使用品：タオルセット・シーツ・カバー類
使用済みも可：夏物衣類(できればスカートやスラックス類はご遠慮下さい)
バッグ・雑貨小物

ご協力下さる方は、「フリーマーケット商品」と記入の上、以下までお送り下さい。誠に申し訳ございませんが送料はご負担下さい。

〒156-0055 世田谷区船橋1-3-17 井内 和夫

電話 03-3429-8897

06年1月～3月に会費・ご寄付を下された方(敬称略・別枠を除き五十音順)

| | | | | | | |
|----------|--------------|------------|----------|--------|--------|-------|
| 井上 卓也 | 大澤 龍 | 小林 栄次郎 | 高木 桂子 | 難波 嗣朗 | 堀内 富美 | 松本 修一 |
| 伊部 勇作 | 小川 英 | 笹本 皓子 | 長崎 新一 | 平塚 千尋 | 堀川 泰義 | 松本 昌幸 |
| 任 皓淳 | 金本 容子 | 佐藤 和之 | 中村 節子 | 古川 かおる | 松井 ふみ子 | 山根 寛 |
| 大坪 玲子 | 神田 幸子 | 下村 紀雄 | 並木 陽子 | 星 光雄 | 松田 明美 | 吉村 悦子 |
| 川越キリスト教会 | 国際化市民フォーラム募金 | コレカラフェスタ募金 | 神保 国男後援会 | | | |

フリーマーケットの商品をご提供下さった方(敬称略・1月27日～4月25日)

谷池 教子

ご入会・ご寄付のお願い

活動会員：年会費 5,000円(学生、未成年者 2,000円)
賛助会員：年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)
法人会員：年会費 1口10万円
ご寄付：2,000円以上おいくらでも

<郵便局振替口座番号>
振込口座 00180-2-25153
日韓アジア基金

活動会員：活動に積極的にご参加いただける方

賛助会員：定期的にご支援いただける方

ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けいたします。

日韓アジア基金の組織

カンボジアNGO ポンロック・タマイ
ディレクター ポット・リテイ

←業務委託→

日韓アジア基金
代表 禹守根 (ウスグン)

NPO法人 日韓アジア基金・日本

代表理事 江本 哲也

韓日アジア基金(韓国)

事務局長 車 京淑(チャキョンスク)

<お問合せ先>

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内

Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)

E-メール: iloveasia@ml-b7.infoseek.co.jp HP: http://www.iloveasiafund.com

発行人 特定非営利活動法人 日韓アジア基金・日本 代表理事 江本 哲也